

佐賀調査報告

現在の関心事と本調査の位置づけ
——震災後の人々の出会いと葛藤を
めぐる社会学的研究

立教大学社会学研究科 筒井 久美子

本報告の概要

- 自己紹介——震災後の活動
- 「さんさん広場」について
- 現在の関心事
- 佐賀調査の位置づけ



自己紹介

——震災後の活動——



自己紹介——震災後の活動

○ 支援団体等の**現地支援活動**へ参加

福島県・宮城県・岩手県での支援活動へ参加。

○ 学生団体 立教大学Frontiersメンバーとして活動

現地支援活動を経験した学生を中心に、2011年6月に発足。ボランティア活動へ一歩踏み出し、活動を継続するためのプラットフォームを目指す。**東京でできる支援活動**。

夏季・冬季休業中、現地支援活動を行う団体と協力し学生を現地派遣

講演会開催

写真展開催

義援金付きグッズ販売

募金活動 など

自己紹介——震災後の活動

現在の活動

- 東京都新宿区における、新宿区社会福祉協議会（以下、社協）と近隣大学の学生による避難者支援と地域コミュニティ活性化を目指した活動「さんさん広場」での参与観察。

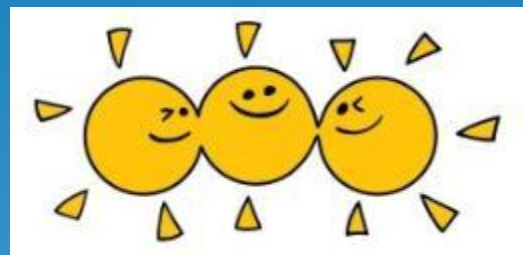


「さんさん広場」 について



「さんさん広場」について

「さんさん広場」とは



- 開始時期：2012年1月
- 活動場所：都営アパートAの集会室・近隣の公園など
- 活動頻度：月2回 13:00から18:00
- ねらい：子どもから大人まで、避難者・地域住民、誰もが集まれる場作りを目指して活動。避難者支援とともに、地域コミュニティ活性化を目指す。

「さんさん広場」について

都営アパートAについて

- 2011年4月より、避難者の受け入れをしている。
- 1948年から1950年に42棟1072戸建設。1990年から1998年に建て替え、現在約2300戸。
- 高齢化率47.7%（2012年11月時点。2012年5月17日読売新聞朝刊）

→都心の「限界集落」としてメディアに取り上げられる。

自治・共益活動が困難。

「さんさん広場」について

東京都への避難者数

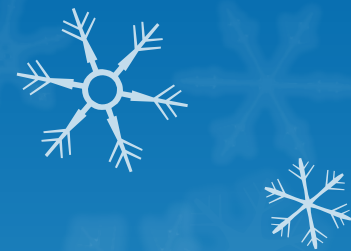
- 9292人

(2012年3月8日東京都総務局)

新宿区への避難者数

- 405人

(2012年3月新宿社協区ヒヤリング)



「さんさん広場」について

居住場所

- 都営アパートA 120世帯、331人
- その他 49世帯、74人

世帯状況

- 乳幼児のいる世帯：16世帯
- 就学児のいる世帯：10世帯
- 高齢者のいる世帯：48世帯

元の居住地（都営アパートAに住む避難者のみ）

- 岩手県：4世帯
- 宮城県：13世帯
- 福島県：103世帯

（2012年3月新宿区社協ヒヤリング）

「さんさん広場」について

都営アパートAへの避難者に対する**支援活動**

2011年

- 4月 都営アパートAへの入居開始
- 4月 住民による支援物資供出・収集、展示・引き渡し会
- 4月から7月 社協が支援物資展示・引き渡し会を住民から引き継ぎ開催。
- 6月 社協による交流サロン開始（6月 グランドプリンスホテル赤坂の避難所解消を受けて）（継続中）
- 8月 株式会社丸井・社協による「お楽しみ衣料品提供会」
- 8月 避難者が実行委員を務めてイベント開催
- 8月 第二東京弁護士会による相談会（9月）
- 9月 東京司法書士会（新宿支部）による相談会
- 11月 フラワーセラピー研究会によるイベント

※東京社会福祉士会・東京司法書士会（新宿支部）が電話相談を実施。

※その他、団体・企業からイベント招待の申し出、チケット提供など。

（新宿区社協提供資料（2011年11月）をもとに作成）

「さんさん広場」について

学生の参入

2011年

- 8月 早稲田大学のサークルと社協とで学習支援「寺子屋」実施
- 12月 「Joy Studyプロジェクト」初会合 7大学9団体が参加

2012年

- 1月 「Joy Studyプロジェクト」、学習支援と多世代交流の場として「さんさん広場」開催
- 4月 「さんさん広場」定期開催開始（月2回13:00-18:00）
- 4月 夏祭り企画始動

避難者支援から地域コミュニティ活性化へ

「さんさん広場」について

さんさん広場という「場」へ集まる人々

- 第1回（1月）は参加者3名（子ども1人・大人2人）に対し学生18名
→6月 参加者32名（子ども18人・大人7人）に対し学生15名。

参加者

- 参加者には避難者以外も含まれている。
- 参加者は小学生、高齢女性が中心。子ども達の父・祖父、母と未就学児、外国籍の子どもたちもいる。
- 口コミやビラを見ての参加、また、地域の公園で学生と子ども達で遊んでいるときに、そこで遊んでいる子どもたちを巻き込む形で参加者が増加してきている。

学生

- 学生は6大学の学部生・大学院生が中心。
- 震災支援を目的として設立された団体、震災前から続くボランティア団体、複数団体によるコンソーシアムに所属するメンバーが中心。
- 団体等のメンバーにならず個人で参加する学生や、ゼミ・授業単位で調査を目的として参加する学生もいる。
- 毎回、リピーターと初回参加者が半数ずつ。



避難者



地域住民



現在の関心事

- 避難してきた人々と以前からその地で生活をしていた人々、さらに震災を機に出会うことになったさまざまな人々が、どのような関係を構築し、混ざり合い葛藤していくのか。
- 避難している人々は家族・地域・学校・職場など自己を支える関係性をはぎ取られ、アイデンティティクライシスの状態にあると考えられる。上記のような出会いの中で、彼・彼女らは、どのようにアイデンティティを変容させていくのか。

佐賀調査の位置づけ

- 東京都新宿区の比較対象として佐賀県鳥栖市・佐賀市をみる。
- 対称軸：都市／地方、原発からの距離

ご清聴ありがとうございました。